

# 紳士のような猿、もしくは猿のような紳士

——『ジキル博士とハイド氏』における嫌悪の分析——

Is He a Gentlemanly Ape, or an Ape-like Gentleman?:

An Analysis of Disgust in *Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde*

桐 山 恵 子

Kiriyama, Keiko

## ABSTRACT

A profound but indescribable disgust prevails among Victorian gentlemen in *Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde*. The mere sight of Mr. Hyde—the double of Dr. Jekyll—incites in all characters their strong aversion for him, though no one exactly identifies where it originates. A positive identification of disgust, however, is indispensable for the full significance of Mr. Hyde as “the other” who makes their identities as genteel gentlemen on the verge of a crisis. This paper with the analysis of disgust elucidates the true relationship between Mr. Hyde and those around him to prove that no clear border line exists between the ape-like monster and civilized gentlemen.

## I はじめに

もし『ジキル博士とハイド氏』のハイドを描け、という問いが出題されたら、恐らく解答用紙上のハイドは醜い不恰好な姿として描かれるだろう。少なくともハイドがジキル博士の悪の分身と知る人なら、悪の権化にふさわしい醜悪な容貌の持ち主を描くにちがいない。ところが、いざハイドの姿を大雑把にはではなく詳細に描こうとすると、それは思ったほど容易ではない。なぜならハイドと関わる人々は、彼の容貌にはどこか異様な部分がある、と曖昧な表現を繰り返すだけで、その具体的造作については語ろうとしない。ハルバースタムが、「多

くの点でハイドは奇怪にもかかわらず、何が奇怪なのかを説明するのは困難だ」(57) と言うように、悪の分身ゆえにハイドは醜いという思い込みがあるだけで、「作者ですらハイドの顔を十分に確認できず、その容貌はエンフィールド氏やアタスン氏により、遠回しの、真実味に欠けた、暗示的表現で叙述」(ナボコフ 193) されるだけだ。作品中、常に「ハイドは曖昧な言葉でしか表現されず」(デューリ xxix)、その容貌の言語化を拒み続ける。

さらに「言語化できず、忘れることもできない青年エドワード・ハイド」(キットソン 167-168) と指摘されるように、「彼の外見は、それを見たすべての人間に嫌悪を引き起こし」(ハルバースタム 81)、一度でもハイドと関わった人間は嫌悪感をぬぐい去ることができない。ところが「誰一人、ハイドの何が嫌悪を引き起こすのかを明確に述べることはできず」(ハルバースタム 81)、結局、彼の容貌と同じく、嫌悪が生じる原因も具体的に説明されない。すなわちハイドとは、周囲の人間に対して大きな影響力をもつにもかかわらず、その容貌も嫌悪を誘発する明確な原因も明かされず、作品中、極めて曖昧な存在にとどまっている。そこで本論では、人々がハイドへ抱く嫌悪を分析することにより、ハイドの容貌の言語化が不可能な理由を追求する。そうすることにより、ヴィクトリア朝の人々にとって、ハイドの存在の完全なる解明が、彼らのアイデンティティを根底から覆す恐ろしい真実を突きつけたことを明かしたい。

## II ラニョン博士の見解

ハイドが誘発する嫌悪を分析するにあたり、手始めにラニョン博士が死の直前に書き記した手記を見てみたい。医者ラニョン博士は、ハイドへの激しい嫌悪の原因追究を医学的見地から試みるが完全なる解明には至らない。しかし彼が最終的に出した見解は、今後の分析において有益と思われる。彼の手記からラニョン博士による嫌悪の分析をたどってみる。

旧友ジキル博士の依頼により、薬品を手渡そうと自宅で待機していたラニョン博士の元に訪問者ハイドがやって来る。ラニョン博士は、初対面であるハイ

ドの印象を次のように記す。「私と向かい合っていた男の本質には、なにか異様かつ忌むべきところがあった。見る者の心をとらえて、ぎょっとさせ、激しい苛立ちを感じさせた」(54)。彼は続けて突発的嫌悪を誘発したハイドについて以下のように描写する。

小柄な男ではあったが、何よりも彼の異常な顔つきに衝撃を受けた。たくましい筋肉の機敏さと、明らかに虚弱な体質が著しい対照を示すことにも驚いた。そして、これらに劣らず驚愕すべき点は、この男の近くにいと、異常な精神的不安を感じることだった。(54)

ハイドの体格については、ある程度、具体的描写が見られる。しかし、ハイドの存在がラニョン博士に引き起こした激しい衝撃に関しては曖昧な表現しかされない。彼は自身が感じた精神的不安を、それに伴う身体的変化の類似ゆえに、医学的言説に置き換えることにより合理的解釈を目指そうとする。

この不安は初期症状の悪寒に似て、脈拍の著しい減少を伴った。その時、私はこれを個人的好みの問題、すなわち自分特有の性質から生じたものとして捉えたので、この急性の症状を不思議に思うばかりだった。(54)

ところが引き続き手記を読み進めていくと、ハイドがジキル博士へと変身する一部始終を目撃し、ハイドの正体を知った、その後の博士の見解に大きな相違が見られることが判明する。彼はかつての考えを誤りと認め、次のように新たな見解を付け加える。

しかし今では、あの異常な不安の原因は、単なる好き嫌いの問題ではなく、人間全体の本質により深く根ざした、より高貴な感情に基づくと確信するに至った。(54)

ハイドが誘発する原因不明の激しい嫌悪が、個人的嗜好の問題ではなく、人間の本質の問題に基づくなら、ハイドと関わる人々は一様にハイドに嫌悪を抱くはずである。ラニョン博士の最終的見解の正当性を確かめるため、エンフィールド氏の見証言から、ハイドが引き起こした少女傷害事件の現場を検分してみたい。

### Ⅲ 嫌悪の伝播

ある冬の日の深夜三時頃、家路を急いでいたエンフィールド氏は、「小柄な男」(9)と幼い少女が十字路で衝突する場面に出くわす。すると驚くべきことに、「その男は子供の体を平然と踏み倒し、泣き叫ぶ少女を道路に置き去りにしたまま立ち去る」という「人間とは思えない」(9) 蛮行を働く。逃走する男をつかまえた後、少女を囲み、すでに人だかりとなった現場へ戻ってきた彼は、そこで初めて男の姿をしっかりと見る。この時エンフィールド氏が示す反応は尋常ではない。なんと彼はハイドの顔を一瞥しただけで、冬の凍えるような深夜にもかかわらず「流れるような汗をかく」(9)。ハイドの容貌は、「一目見ただけで激しい嫌悪」を感じ、冷や汗をかくほど「醜悪」(9) にもかかわらず、エンフィールド氏は、やはり、それを的確に言い表すことができない。

その男の容貌を叙述するのは容易ではない。その外見には、どこかおかしい点がある。なにか不快で、どうしようもなく忌まわしいところが。こんなにも嫌悪を抱かせる人間には出会ったことがない。しかし、その理由は分からない。何かが歪んでいるのだ。どの部分が特定することはできないが、とにかく奇形という強い印象を受けた。名付けようがないが、その男は本当に異様な容貌の持ち主だ。(12)

エンフィールド氏にとって、言語化不能のハイドの容貌が即座に嫌悪すべき対象となったのは明らかだ。

しかしラニョン博士が言うように、ハイドへの嫌悪が個人的嗜好の問題ではなく、人間の本質に根ざした感情に起因するなら、嫌悪を抱くのはエンフィールド氏一人だけではないはずだ。事実、この推測は、エンフィールド氏が語る事件現場のその後の状況を見ることにより立証される。

奇妙な現象が起こったのだ。私は一目でハイド氏に嫌悪を抱いた。当然のことながら、少女の家族も彼への嫌悪を表した。しかし医者まで同じ状況になったのには驚いた……医者が、私がつかまえてきた男を見るたびに、吐き気を催して顔を蒼白にし、男を殺してしまいたい、という欲望を抱いているのが分かった。(9)

エンフィールド氏が感じたハイドへの嫌悪は、まず被害者の家族に伝播する。娘に暴力をふるった男に対して、その家族が憎しみを抱くのは当然だろう。しかし彼らが感じた嫌悪は、その後、現場にかけつけた医者にまで及び、彼は吐き気を催し、顔から血の気が引くほどハイドの存在に激しく動揺する。「殺してしまいたい」と願うほど極端な段階に達した医者 of ハイドに対する嫌悪は、一見、妥当性を欠いているようだ。

ところが、ハイドへの殺人願望を抱いたのは医者だけではなく。「私は医者が心中考えている思いを理解していたし、彼も私の気持ちを理解していた」(9)と述べるエンフィールド氏は、医者が感じた殺意を異常とはみなさず、逆にそれに同意している。つまり初対面であるエンフィールド氏と医者は、ハイドの存在を間におき、彼への殺人願望を共有することにより、相互理解を成し遂げたのだ。言い換えるなら、ハイドを嫌悪すべき対象として、自分たちから切り離すことにより、彼らは互いの結びつきを一層強化させている。

さらに彼らが共有したハイドへの過度な嫌悪は、とどまるところを知らず、事件とは直接関わりのない野次馬的に集まった女性たちにも伝播する。

女性たちは、まるで飢えた怪物のようにハイド氏を取り囲んだので、我々は可能な限り、彼女たちをその男に近づけないようにしなければならなかった。こんなにも顔に敵意をむき出しにした人間の集団を、私はこれまで見たことはなかった。(10)

ハイドを捕えたエンフィールド氏や被害者の家族、治療にあたった医者とは異なり、事件の当事者ではない女性たちもハイドに激しい嫌悪を覚える。さらに彼女たちの集積した嫌悪は、集団暴力になりかねないほど異常な段階に発展する。ハイドへの殺人願望を媒介とし、エンフィールド氏と医者が相互理解を達成したように、ここでも、本来、烏合の衆だった女性たちは、ハイドへ嫌悪を抱く暴徒という形において一致団結している。

このように最初にエンフィールド氏が感じた嫌悪は、彼の個人的感情の範疇にとどまらず、ハイドを取り囲んだ人々へあっという間に伝播した。なぜならハルバースタムが言うように、「ジキル博士の暗黒の面であるハイドは、小説において他者そのものとして機能する。言い換えるなら、ハイドとは醜悪、不快の特色の具現化であり、それらを邪悪の典型的表象となしている」(80)。事件現場の人々は、人間業とは思えない邪悪な行為を犯した醜悪なハイドを、嫌悪すべき「他者」として自分たちと切り離すことにより互いの結束を強めた。すなわちエンフィールド氏が先の引用冒頭で述べた「奇妙な現象」とは、ハイドを中心に人々の間に生じた「嫌悪の伝播」に他ならない。ラニョン博士の最終的見解——ハイドへの嫌悪は個人的好き嫌いの問題ではなく、人間全体の本質に根ざした感情に基づく——は、事件現場で見られた「嫌悪の伝播」により確かに裏付けられたのである。

#### IV 類人猿

ハイドの存在が、すべての人間にとり激しい嫌悪の対象となることは明らかとなった。しかし、誰一人その容貌を詳細に語ることはできず、嫌悪を誘発する

源である「人間全体の本質により深く根ざした、より高貴な感情」の具体的内容も未だ明かされてはいない。言語化できないハイドの容貌と嫌悪に隠された秘密を暴くため、次に、その死を自分の目で確認するまでハイドを追い続けたアタスン氏の嫌悪を分析してみる。

傷害事件の目撃談をエンフィールド氏から聞いて以来、実物のハイドを一目見たいと張り込みを続けていたアタスン氏は、やはり初めて出会うハイドに激しい嫌悪を感じる。「二人〔アタスン氏とハイド〕の間にはかなり距離があったにもかかわらず、ハイドを見るなり、アタスン氏は自分の本質とは相容れぬ嫌悪を感じた」(16-17)。彼は引き続きハイドについて次のように述べる。

ハイド氏は青白い小人のようだ。これといった奇形は見当たらないにもかかわらず、身体が歪んでいる印象を与えた。不快な笑みの持ち主で、卑屈さと大胆さが入り混じった、殺気じみた様子だった。ささやくように話すしわがれた声は途切れがちだ。そして、これらすべての要素がハイドを奇怪に見せていた。(18)

アタスン氏はハイドの笑い方や声を含むいくつかの特徴を指摘している。しかし、「これらすべての特徴をもっても、アタスン氏がハイドに対し、これまでに抱いた得体の知れない嫌悪、不快、恐怖のわけを説明するには至らなかった」(18)。「ハイドが有する奇妙な悪夢のような何かに感化された」にもかかわらず、「まさに事実のみを重んじる」アタスン氏は、「あまりに平凡なありきたりの人間であるため、ハイドが誘発した原因不明の嫌悪を言い表すことができない」(ナボコフ 192-193)。そして得体の知れないハイドに苛立ちを覚えた彼は、とうとう「全くもって、あの男は人間とは思えない！ 洞穴に住んでいる類人猿といえどだろうか？」(18)と言い放つ。人間の認識能力の限界を超えた表現不能の奇怪なハイドを、もはやアタスン氏は自分と同じ種に属した人間とはみなせない。ハイドの存在に困惑する彼は、ハイドを自分とは関わりのない「他者」として

切り離すべく、ハイドを類人猿の枠組みに組み込もうとする。

一見、突飛にも思える彼の主張は、ジキル博士の召使いプールのハイドへの呼称により信憑性を帯びてくる。プールはハイドを指し示す際に、「彼」ではなく、頻繁に「動物」(“creature”) (45) や「もの」(“thing”) (44, 45, 46) という呼称を使用する。このことは、プールも、ハイドを自分たちと同じ人間とみなしてよいのかどうか疑問に感じていることを表している。しかも彼の証言によれば、「その動物は腰から二重に折り曲がり」(45)、「仮面をつけたまま猿のように化学薬品の間を飛び回っていた」(46)。腰を曲げた姿勢のまま動き回るハイドは上手く直立歩行ができないのかもしれない。さらに身体の一部である彼の手に注目するなら、「ハイドの筋張った、ごつごつとした関節が際立つ、黒い毛がもじゃもじゃと生えた手」(64) は、やはり彼の外見が濃い体毛に覆われた類人猿に近いことを示す。直立歩行を実現した近代人に進化しきれず、その前段階の猿のようなハイドを、立派な体格をもつヴィクトリア朝の近代人が、自分たちとは異なった種に属した「他者」として位置づけ、両者の間に境界線を引くのは当然かもしれない。

ところが猿のような外見のハイドの暮らしぶりが、類人猿の原始的生活とかけ離れているどころか、ヴィクトリア朝紳士のそれに極めて似ていることは注目に値する。ハイドの住居は、類人猿が住む洞穴ではなく、「ワインが一杯に入った戸棚、銀の皿、上品なテーブル・クロス、壁には素晴らしい絵……たくさんの好ましい色で織られた数々の絨毯」で「豪奢で趣味よく装飾された家」(27) である。「ハイドが使用する部屋」は、ブランドリンガーの言葉を借りるなら、「明らかに芸術に快樂を見出すエピキュリアンのものである」(178)。

また、死んだハイドを最初に確認したアタスン氏の証言によれば、ハイドの死体の横には、「お湯が沸騰しつつあるやかん」と「カップに砂糖が入れられたままのお茶の道具」(47) が用意されていた。このことは、ハイドが死の直前までお茶を飲もうとしていたことを物語っている。趣味よく装飾された家を住居に構えるだけでなく、ハイドは英国紳士が行うように、お茶を楽しむという殊勝な



習慣を持ち合わせていた。アラータが、「作品中、ハイドを指し示す名詞で最も頻繁に使われるのは、『怪物』でも『悪党』でもなく『紳士』である」(38)と指摘するように、ハイドには英国紳士としての習慣や教養が見出せる。人々が感じる激しい嫌悪とは裏腹に、ハイドの内実にはヴィクトリア朝の近代人が有する性質とかなり近いものが存在しているのかもしれない。この両者の近似性を追及する上で、ハイドと最も近接した存在であるジキル博士との分身関係の考察は必須である。ジキル博士が、自らの分身としてハイドを生み出すきっかけを探してみよう。

## V 篡奪者

世間的には善良な紳士としてのアイデンティティを維持してきたジキル博士の心の内には、元来、「止むことのない快楽を追い求める性質」(58)が存在していた。ところが彼のまた別の欲望——「他人から尊敬され、人前で必要以上に体裁を保ちたいとする欲望」(58)——があまりに強かったため、彼は快楽を好む性質を他人の目から隠し、その完全なる抑圧を試みる。ジキル博士は自分の中の悪の性質を忌むべきものとして捉え、それを自分とは関係のない「他者」として排除することにより、善良な紳士としての「自己」を確立しようとした。つまり分身ハイドとは、通常は表面に現れることのない博士の潜在的悪の性質が具現化した存在である。

悪の権化ハイドはロンドンの街路で偶然出会った人間に、「猿が見せるような激怒」(25)で暴力をふるう野蛮な一面を有していた。しかしまた、自分の身を守るためには、「大いなる意志の力で怒りを抑制」(70)し、それ以上の無謀な行為を思いとどまる抜け目ない一面も持っている。ジキル博士が認めるように、「その動物 [ハイド] は」無能と決めつけるには、あまりにも「ずる賢い」(70)。実際それを証明するように、一つの肉体をかけた両者の争いは、命尽きた最後の姿がハイドだったことから明らかなように、「背丈があり立派な身体をもった」近代人が、「小人のように矮小な」(44)類人猿に敗北して終わる。一つの肉体

をめぐる二つのアイデンティティの争いは、善良な近代人としてのアイデンティティが、邪悪な猿のそれに乗っ取られて終わりを迎える。分身研究家のハードマンが言うように、ハイドはジキル博士にとって、まさに「篡奪者」そのものだった。

ジキル博士とハイド間の均衡は壊されていく。ジキルは自らの意志によって変身する力を徐々に失い、変身したハイドから元の姿に戻ることができなくなる……この分身 [ハイド] は、篡奪者である。(136)

「他者」として排除されていたハイドが「篡奪者」へと変貌を遂げた時、ジキル博士として顕在化していた善良な紳士としてのアイデンティティは壊されてしまう。両者の境界線は、篡奪者の侵入をたやすく許すほど極めて脆弱だった。そして体裁のため被り続けた、紳士としての変装用の仮面が、ジキル博士から篡奪者により奪い取られた後に、そこに見え隠れする顔は悪の権化ハイドに他ならない。

あらゆる人間は……変装している。皆、公にすることのできない秘密をかかえている。そしてその秘密ゆえに、彼らは日常生活に必要な見かけの外見を保つため、魂とは相反する仮面を被らざるを得ない。(リード 348)

なぜならホートンが「道徳的偽装」と名付けたヴィクトリア朝に生きた人々は、誰もが世間体を保つために、仮面を被らずにはいられなかった。

人間とは、誰しも時には、実際の自分以上に善い人間であるという振りを、自分に対してですら行うものだ。しかしヴィクトリア朝の人々は、我々がそうである以上に自己を欺く傾向が一層強かった。というのも、彼らが生きたヴィクトリア朝とは、人間の本質において、到底到達できない高い理想を、その行動規範として設定した時代だった。(404-405)

ジキル博士が維持してきた善良な紳士としての「自己」は仮面装着による変装に過ぎず、美しい仮面の下には、「公にすることのできない秘密」である邪悪なハイドが常に潜んでいた。そして仮面の下に隠されていたはずの「他者」の出現は、ジキル博士とハイドの関係における恐ろしい真実を白日の下にさらすことになる。「ハイド」が「立派なジキル博士の肉体に隠された存在」（ハルバースタム 20）なら、すなわちジキル博士とは、ハイドが、「日常生活で必要な見かけの外見を保つため」に、美しい仮面を被り変装した姿、と言い換え可能である。チェスタトンが、「この作品で暴かれる真の衝撃的発見とは、一人の人間が二人の男だったということではなく、二人の男が一人の人間だったこと」（67）と述べるように、両者の存在を明確に切り離すなど最初から不可能だった。「ジキルとハイドは二人の人間であり、一人の人間でもある。異なっていて、同じでもある。明確な二元的対立をなすが、また同時に統一を形成する補完的ペアでもある。それゆえ両者の境界は消え去り、（対立に基づく）固定された意味は無効となる」（デューリ xxvii）。両者を分かち境界線は、篡奪者ハイドが姿を現すまでのつかの間、効力を有したかもしれない。しかし、その境界線の消失は、ハイドを「他者」として排除することにより成立していたはずの「自己」ジキル博士は、実は、「他者」をすでに包括した存在だったという恐ろしい真実を暴露してしまった。

## VI 嫌悪の秘密

ジキル博士とハイドの真の関係が明らかとなった今、ラニョン博士の手記から始まった嫌悪の分析もいよいよ終わりに近づいてきた。すでに見たようにラニョン博士は、ハイドへの嫌悪は「人間全体の本質により深く根ざした、より高貴な感情に基づく」と結論づけたが、その具体的内容は記さなかった。彼が死を目の前にしてまで明確な原因を明かそうとしなかったわけは、彼自身もジキル博士と同じく、「道徳的偽装」の深みに陥っていたからだ。言い換えるならラニョン博士も、ヴィクトリア朝紳士としての体面を保つため、「自己」に存在する悪

の性質を「他者」ハイドとして切り離し、偽りの仮面の下に隠し続けていた。そして善良な医師としての仮面を被ったラニョン博士が、ハイドがジキル博士へと変身する様を目の当たりにした時、自分の変装もいつか見破られる危険を痛切に感じたのだ。模範的紳士ジキル博士ですらハイドへの変身を避けられないなら、ラニョン博士の変装の露呈も時間の問題である。仮面の下に隠された「他者」ハイドが、いつ何時、篡奪者となり出現し、「自己」保持のために身につけた美しい仮面を奪い取るのか誰にも予測不可能だ。善良な医師としてのアイデンティティを維持しなければならないラニョン博士にとって、ハイドへの変身の可能性があるという恐ろしい事実は、決して明かされてはならない最大の秘密である。嫌悪が生じる決定的理由を手記に記すことは、医師としての「自己」は仮面により変装した偽りの姿に過ぎず、その下には「他者」ハイドが存在していることを、自ら世間に暴露することを意味した。

すなわち嫌悪の原因は、解明できなかったのではなく、解明されてはならなかったのだ。その完全なる原因解明の瞬間は、ヴィクトリア朝紳士としてのアイデンティティを保たなければならない人間にとって、永遠に延期される必要があった。なぜならハイドへの過度な嫌悪は、その存在を激しく憎むことにより、どうにか切り離さなければならないほど、ハイドが彼らと近接した存在、さらに言うならば、彼ら自身であることを証明していた。ガレットが「登場人物たちは、自分自身とハイドを分離しようとするが、ハイドに対して感じる『本能的』嫌悪が彼らとハイドを結びつける」(67)と指摘するように、猿のような外見から判断すれば、疑うことなく「他者」であるべき存在が、実は完全なる「他者」ではないという彼らの恐怖が、過度の嫌悪という歪んだ形で顕在化したのだ。ハイドに対する嫌悪の原因を突き止めることは、「公にすることができない秘密」そのものであるハイドを、「自己」に、最初から、すでに内在させていたことを、自ら世間に告白することを意味した。

嫌悪を生み出す「人間全体の本质により深く根ざした、より高貴な感情」とは、自分たちはあくまで悪を嫌悪する善良な近代人として、ヴィクトリア朝を生

き抜かなければならないという「高貴」な感情である。たとえその「高貴」さが、偽りの美しい仮面を被り変装することにより、世間を欺くことを意味したとしても。悪の性質は猿のようなハイドだけが負えば十分であり、彼らはそれを「他者」として徹底的に嫌悪し、美しい仮面を身につけた「自己」として、死に至るまで変装し続ける他なかった。

## VII 終わりに

ハイドの存在はあらゆる人間に激しい衝撃を与え、ハイドへの嫌悪は彼を取り巻く人間へあつという間に伝播した。事件現場で確認された「嫌悪の伝播」は、善良な近代人としてのアイデンティティを有した「自己」を確立するため、ハイドを憎むべき「他者」として徹底的に排除しようとした結果、引き起こされた現象である。しかし両者を分かť境界線は篡奪者により破壊され、ハイドの存在は彼らと無関係の「他者」ではなく、「自己」それ自身に、すでに内在した存在であることが明かされた。ジキル博士がその肉体の皮膚の下に隠されたハイドの変装した姿だったように、ヴィクトリア朝の人々が達成した「文明とは、皮膚の厚さしかないような極めて浅薄なものにすぎず、あらゆる文明人の皮膚の下には野蛮人が隠されていた」（ピケット 209）。両者を区別するために引かれた境界線など、つかの間、有効な虚構に過ぎなかったのだ。

善良なる紳士ジキル博士と邪悪な猿ハイドとを分かť境界線が失われた今、最後に再び本論冒頭の問いに立ち返ってみよう。果たしてハイドを描け、という問いに、どのような姿を解答用紙に描けば正解になるのか。少なくとも、悪そのものを具現化した醜悪な姿を描いても完全な正解とはならない。なぜなら、虚構の境界線により作り上げられたハイドの姿を求める問題に、最初から完全なる正解など存在しない。ハイドの容貌を問われた人々が一様に口を濁したように、ハイドが、紳士のような猿なのか、もしくは猿のような紳士なのか、もはや誰にも解答不能なのだ。

## 引用文献

- Arata, Stephen. *Fictions of Loss in the Victorian Fin De Siecle*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Brantlinger, Patrick. *The Reading Lesson: The Threat of Mass Literacy in Nineteenth-Century British Fiction*. Indianapolis: Indiana UP, 1998.
- Chesterton, G.K. "Robert Louis Stevenson." *The Collected Works of G.K. Chesterton XVIII*. San Francisco: Ignatius, 1991. 39-147.
- Dury, Richard. Introduction. *Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde*. Ed. Richard Dury. Edinburgh: Edinburgh UP, 2004. xix-lxii.
- Garrett, Peter K. "Cries and Voices: Reading *Jekyll and Hyde*." *Dr Jekyll and Mr Hyde after one Hundred Years*. Eds. William Veeder and Gordon Hirsch. Chicago: U of Chicago P, 1988. 59-72.
- Halberstam, Judith. *Skin Shows: Gothic Horror and the Technology of Monsters*. Durham: Duke UP, 1995.
- Herdman, John. *The Double in Nineteenth-Century Fiction*. New York: St. Martin's, 1991.
- Houghton, Walter E. *The Victorian Frame of Mind, 1830-1870*. New Haven: Yale UP, 1957.
- Kitson, Peter J. "The Victorian Gothic." *A Companion to the Victorian Novel*. Eds. William Baker and Kenneth Womack. Connecticut: Greenwood, 2002. 164-176.
- Nabokov, Vladimir. "Robert Louis Stevenson." *Lectures on Literature*. New York: Harvest, 1982. 179-206.
- Pykett, Lyn. "Sensation and the fantastic in the Victorian novel." *The Cambridge Companion to The Victorian Novel*. Ed. Deirdre David. Cambridge: Cambridge UP, 2001. 192-211.
- Reed, John R. *Victorian Conventions*. Ohio: Ohio UP, 1975.
- Stevenson, Robert Louis. *Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde. The Collected Works of Robert Louis Stevenson*. Ed. Richard Dury. Edinburgh: Edinburgh UP, 2004.